

半夏生

浜田 道雄

「半夏生」は雑節の一つで、夏至から十一日目ころをいう。梅雨も終りに近く、ゲリラ雨など大雨の多い季節である。暦には「陰気多きため井戸に蓋をし、身体に注意する」との戒めがある。

この「半夏生」という言葉には、なんとも不思議な奇妙な語感がある。「夏がやってきたような、まだのような？」「夏至は過ぎたというのに、夏はまだ半ばなの？」と行って、人をひどく中途半端で不安な気分になせ、落ち着かせないのだ。

この名はまたハンゲシヨウが咲くころに由来するともいわれている。

ちょうど半夏生にあたる七月の初め、北鎌倉の寺にアジサイの花を見ようと出かけた。戻り梅雨の空が重く垂れ込めてときおり雨も落ちかかる午後で、まだ三時には間があるというのに樹影濃い寺の庭にはすでに夕べのような薄闇が広がりはじめていた。アジサイは盛りこそ過ぎてはいたが、まだ庭のそこに青ムラサキ、紅ムラサキの花の茂みを残していて、十分にその艶やかな姿を楽しませてくれている。

そんな庭の水辺にひときわ眼を引く白いかたまりがあった。近づいて見ると、ギボウシを少し小ぶりにしたような舟形の葉の群れで、真ん中あたりがいたずらっ子に白ペンキをぶちまけられたかように、みな白く不自然に染まっている。その白い葉の間からは花房が長く伸びて、ここにもたくさん小さな白い花がついていた。

ハンゲシヨウだった。白く染まった葉は花房を守るかのようにその周りを取り囲み、やぐらの並ぶ崖下の薄闇に浮かんでいる。その姿はこの世を離れたどこか遠くの世界にでもあるかのように不安で、見るものをひどく落ち着かない気分になせた。

ハンゲシヨウは虫媒花である。にもかかわらず蜜腺をもたない。だから、葉の白化は花粉を運ぶ昆虫をこの小さな花に呼び寄せるために、特別に進化した結果なのかもしれない。

それにしても地味な花である。自然の片隅にひっそりと咲くこんな小さな花に先人がこの季節の思いを込めたのかと思うと、その自然に対する感覚の鋭さ、細やかさには改めて感嘆するほかはない。